モンゴメリー著・村岡花子訳「アンの友達―赤毛のアン・シリーズ 4 ―」新潮文庫、新潮社 2008 年 2 月 25 日刊を読む

1．フェリクスは当惑(とうわく)したようすで、静かに絃(げん)の上に弓を引いた。なにを弾いたらよいか見当がつかなかったのである。そのとき、フェリクスの目はしわくちゃの枕に横たわったナオミの燃えるような、催眠術(さいみんじゅつ)にかかったかのような、青い目と出会い、とらえられた。少年の顔にふしぎな霊感(れいかん)があらわれ、彼は弾きはじめたが、それはフェリクス自身ではなく、なにかより偉大(いだい)な力によるものであり、彼はただそれに服従するものにすぎないかのようであった。

2．美しい、静かな、驚くべき音楽が部屋に忍(しの)びこんできた。レオナード氏は心の痛みも忘れ、呆気(あっけ)にとられて聞きいった。今まで一度もこのようなものは聞いたことがなかった。この子はどうしてこんなふうに弾けるのだろう？ナオミの顔を見てレオナード氏はその変化に驚いた。恐怖と激情(げきじょう)が消えつつあり、ナオミはフェリクスから目も離(はな)さず、息をのんでじっと耳をかたむけていた。寝床のすそでは少女が頬(ほお)に涙をしたたらせながらすわっていた。

3．そのふしぎな楽の音には無邪気な、陽気な子供時代の喜びに、波の笑い声や、楽しい風の招きが織りなされていた。やがて、それは青春の奔放(ほんぽう)な、気ままな夢(ゆめ)へと移っていったが、奔放さ、気ままさがきわまって、美しく清らかな夢であった。それにつづき、若い者の愛の歓喜―――柔順(じゅうじゅん)な、すべてをささげつくした愛があらわれた。

4．音楽が変わった。涙も出ないほどの苦悩、欺(あざむ)かれ見捨てられた心のもだえがこもっていた。その耐えられないほどのつらさに、レオナード氏は両手で耳をふさがんばかりであった。しかし、死にかけている女の顔には、なにか口に言われぬ、ながい間秘めていた苦痛がついにはけ口を見いだし、傷が癒(い)えたかのような、ふしぎな安堵(あんど)の表情があるのみだった。

5．ゆううつな絶望のはての無関心が次にあらわれ、胸にくすぶる反抗(はんこう)と悲哀(ひあい)の苦しさ、善なるものいっさいをかなぐり捨てた向こう見ずな気持がこもっていた。今や音楽には、ある言うに言われぬ邪悪(じゃあく)なものがこめられてきた―――あまりの邪悪さに、―――レオナード氏の清浄(せいじょう)な心はいとわしさにおののき、マギーはすくみあがって、おびえた動物のようにすすり泣いた。

6．ふたたび音楽は変化した。そしてそれには苦悩と恐(おそ)れ―――後悔と許しを求める叫(さけ)びがみちてきた。レオナード氏にとってその中にはなにかふしぎな聞き慣れたものがあった。どこで聞いたか思いだそうとほねおった結果、ふいに悟った―――フェリクスがくる前にナオミの恐ろしい言葉の中で聞いたのだった。レオナード氏は畏(おそ)れに似た気持で孫をながめた。そこにはレオナード氏のあずかり知らぬ力―――ふしぎな恐るべき力があった。それは神のものか？それとも悪魔のものか？

7．音楽に最後の変化が訪(おとず)れた。そしていまやそれは全然、音楽ではなかった―――偉大な無限の許し、すへでを包容する愛であった。それは病める心魂(しんこん)を癒した。それは光であり、希望であり、平和であった。この場には似合わないかのように思える聖句がレオナード氏の頭にうかんできた――――「これは神の家である。これは天の門である」

8．フェリクスはバイオリンをおろし、寝床(ねどこ)のそばの椅子(いす)にぐったりすわった。霊感の光はその顔からうすれ、ふたたび彼はただの疲(つか)れた少年に返っていた。だが、ステファン・レオナードは子供のようにすすり泣きながらひざまずき、ナオミ・クラークは両手を胸に組み合わせ、身動きもせずに横たわっていた。

「やっとわかりました」ナオミはいとも静かに言った。「今までわからなかったのが―――今、とてもはっきりしました。感じでわかるのです。神様は愛の神様です。どんな物でも許してくださる―――わたしさえ―――わたしでさえ。なにもかも、すっかり知ってなさるのだ。わたしはもうこわくない。わたしの赤ん坊(ぼう)が生きていたら、その子がどんなに悪い子であろうと、また、どんなことをしようと愛し、許してやるように、神様はわたしを愛し許してくださるのだ。牧師さんはそう話してくれたけど、わたしには信じられなかった。今じゃわかります。そして今後、神様があんたをよこしてくださったのは、坊や、それをわたしにわかる話し方でお知らせくださるためだつたのです」

9．ナオミ・クラークは海に夜明けが訪れたときに死んだ。寝床のそばで寝ずの番をしていたレオナード氏は立ち上がり、戸口のほうへ行った。彼の前には港がほのかな光の中で灰色にいかめしくひろがっていたが、はるか向こうでは太陽が海面を覆(おお)っている乳色の霧(きり)を裂きはなしており、その下では水がきらめきそめていた。

10. 岬(みさき)の樅(もみ)の木は静かにそよぎ、ささやきかわしていた。全世界は春と復活と生命の歌を歌っており、レオナード氏の背後では死せるナオミの顔がはかり知ることのできない平安をたたえていた。

P138 ～ P141

［コメント］

悲惨な人生を送ったナオミ・クラークの最後の時と生き生きとしたフォリクス少年のバイオリン、モンゴメリー著・村岡花子訳「赤毛のアン」シリーズの第 4 巻「アンの友達」の一場面。是非、御一読を。

― 2015 年 4 月 28 日林　明夫記―